



Title	日本とインドネシアの伝統的な布のアップサイクル文化の比較：持続可能性と伝統の共存
Author(s)	Nadya, Zahraeni Aulia Ulvita
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100491
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本とインドネシアの伝統的な布のアップサイクル文化の比較

—持続可能性と伝統の共存—

Nadya Zahrani Aulia Ulvita(日本学・M1)

1. はじめに

現在、アップサイクルの取り組みが行われている。アップサイクルとは、捨てられる寸前のものにデザインやアイデアを加え、元の製品を超える新たな価値や機能を与えて再生させることを意味する。アップサイクルとリサイクルはどちらも環境の持続可能性にとって重要だが、リサイクルが原材料に戻すためにエネルギーを多く消費するのに比べ、アップサイクルはより地球に優しいと見なされている。アップサイクルは幅広いものに利用されており、現在は布のアップサイクルもよく盛んに行われている。

これまで、布のアップサイクルに関する研究は行われてきたが、異文化比較に焦点を当てた研究はほとんどみられない。日本の着物は、昔から世代を超えて受け継がれてきたが、現在では着物を着る機会が少なくなり、タンスにしまわれたり、古着屋に売られたりすることが多い。しかし、最近は、古い着物を使用して美しい傘や靴、さまざまなものを作らせる人が増えてきた。一方、インドネシアのロンボク島では、日常生活でスカートとして着用しているベンダンが古くなると捨てることが一般的である。それは、インドネシアでは人に自分が使用した物を渡す文化がほとんどないためである。しかし、近年、古いベンダンをアップサイクルするブランドも登場するようになった。このように、着物とベンダンにはそれぞれの違いがあり、両国の文化における独自性が反映されている。そのため、本研究では、日本の着物とインドネシアのロンボク島のベンダンを研究対象として、両国の伝統的な布に関する背景や現代の実践を比較することにより着物とベンダンのアップサイクル事例における共通点や相違点を考察し、日本とインドネシアの布のアップサイクルの特徴を明らかにしたい。本研究では、着物とベンダンのアップサイクル事例を考察するために文献調査とフィールドワークによる比較分析を行う。

2. 着物のアップサイクル

着物のアップサイクルを行っているブランドの中で、「あきざくら」というブランドを紹介したい。あきざくらは、着なくなった着物を使用して和傘に生まれ変わらせる取り組みを行っている。代表の山村さんは、現代の日本社会が生きづらいと感じ、もっと優しく、もっと「調和」のある社会を作りたいという思いがきっかけで、あきざくらを始めた。彼女は、かつて日本社会が「調和」を大切にしていた点に感銘を受けていた。その「調和」と「思いやりの精神」を現代に復活させたいと考えた。そこで、山村さんは茶道や華道といった日本の伝統文化に触れる活動を始めた。そして、着物を着る機会があり、自ら着物を着てみたところ普段よりも礼儀正しくなり、相手に対して思いやりを持つようになるという気づきがあった。この経験から、着物には何かの特別な力があり、日本人の調和の心を甦らせるのではないかと考えるようになった。したがって、着物を中心としたビジネスを始めようと考える中で、着物のアップサイクルにたどり着き、それがアップサイクルを始めるきっかけとなった。また、着物は一度解いたら何度も調整でき、着物として使えなくなても再利用できるため、非常に持続可能な衣装である。

着物を着る機会が少ない現代では、着物をアップサイクルすることは非常に適していると言える。特に、着物には家族の思い出が込められており、捨てがたいものである。したがって、古い着物を日常的に身近なアイテムに変えることで、着物に命を吹き込むだけでなく、大切な思い出や日本の伝統を日々の生活の中で保つことができる。海外からSDGsという概念が導入される以前、日本人はかつて循環型社会の中で暮らしており、あらゆるものの大切にすることが強く根付いていた。役割を果たしたものは別の形で再利用したり、ものが壊されたら修理したりする習慣が当たり前のことであった。それらのものにもう一度新たな命を吹き込むと、より長く、より大切に使い続けることができる。こういう実践は、「もつたいない」という精神に加え、すべてのものに魂が宿っているという日本のアニミズム的な信仰とも深く結びついている。

このような伝統的な価値観は現代社会においても重要であり、モノや限られた自然を大切にし、自然や他者と調和して生きることの大切さを、山村さんは多くの人々に思い出してほしいと考えている。さらに、ものの再生や昔の日本の生き方や考え方を日本人だけでなく、日本を訪れる外国人観光客にも伝えたいと考えている。

山村さんは、外国人観光客向けの着物体験や日傘体験ツアーに積極的に取り組んでいる。観光客にただ着物を体験してもらうだけでなく、日本文化について学び、より深く理解してもらうことを目指している。

3. ベンダンのアップサイクル

筆者は2024年にインドネシアのロンボク島を訪れ、ベンダンをアップサイクルするブランドに聞き取り調査を行った。インタビューしたブランドは「Ninē Ninē Studio」である。「Ninē Ninē」とはロンボク（ササク語）で「女性」という意味し、ロンボクの織物製作や使用済みベンダンのアップサイクル活動を通じて、ロンボクの女性たちをエンパワーメントすることを目指している。

ブランドの代表者はフランス人女性で、現地の人と結婚し、ロンボク島のエプヌット村に住んでいた。当時、その村に住んでいた女性たちは貧困に暮らしていたが、女性たちはお互いに支え合っていた。女性たちは外で働くことが難しいため、収入を得る機会が限られている。しかし、織物を織る技術を持っており、その模様や技法は非常に優れている。こうした状況を踏まえ、代表のルルは現地の女性たち、特に高齢の女性に職業を与え、女性たちのスキルを活かしながら支援したいと考えるようになった。

ササクの織物には爽やかな色彩と多くの線が特徴だが、海外の観光客には少し派手に感じられることがある。そのため、ルルは観光客の興味を引きつけるため、現代的で落ち着いたデザインのササク織物を目指した。織物の各線には特定の意味が込められており、色の組み合わせも慎重に選ぶ必要がある。ルルは女性たちと協力し、模様を簡素化し、重要な線だけを取り入れるデザインに仕上げた。色の選択に関しては、当初ルルが色の組み合わせを提案していたが、最終的には女性たちと意見を共有し、どの色が適切でどの色が不適切かを確認しながら進めた。

織物の技術を持つのは、主に結婚している女性や高齢の女性である。しかし、ルルはより幅広い女性たちを支援したいと考え、若い女性にも雇用の機会を提供したいと思った。若い女性は縫製のスキルを持っているため、その能力を活かせる場を提供しようと考えた。ロンボク島の女性たちは、日常生活でベンダンをスカートとして使用しているが、使わなくなったベンダンは捨てられたり、雑巾として再利用されることが一般的である。このように不要になったベンダンが大量に蓄積されている状況を見て、ルルはそれらを再利用し、新しい製品に生まれ変わらせるアップサイクル活動を始めた。女性たちから不要なベンダンを集める際には、シミや穴の状態を考慮しながら適正な報酬を支払う。その後、集めたベンダンを縫製技術を活かして加工し、バッグやポーチなどのさまざまな製品として再生させている。

Ninē Ninē Studioは、新しいスキルや知識を女性たちに身に付けさせることだけでなく、女性に安全な職場環境も提供している。また、ロンボクの文化を広め、地元の人々と外国人観光客の交流を促進するために、ロンボクの食べ物を作るワークショップも開催している。

4. 比較と分析

4.1 日本とインドネシアのアップサイクルの実践

あきざくらは、様々な職人と協力し、着物をアップサイクルするブランドである。たとえば、顧客から預かった着物は解かれ、撥水加工や撥油加工、黄変防止の処理を施すために京都の加工場へ送られる。この加工が完了した後、布は東京の傘職人のもとへ届けられ、新しい製品に生まれ変わる。あきざくらのアップサイクル活動は、タンスに眠る着物を日常生活で再利用可能にすることを目的としている。この取り組みにより、過去の世代から受け継がれた日本の文化や考え方を忘れられることなく、再び人々に尊重されることを目指している。

一方、ベンダンのアップサイクルは、多くの地域住民を巻き込んで行われる。たとえば、1人が地元の人々を雇用し、次第にコミュニティを形成していく。この活動は、特に女性に雇用の機会を提供し、新たなスキルや知識を身に付けさせることで、自立を促すこと目的としている。

4.2 着物とベンダンのアップサイクルの共通点と相違点

着物とベンダンのアップサイクルには共通点と相違点がある。共通点としては、どちらもアップサイクルによって伝統文化や価値観を海外に紹介することを目的としており、日常生活で使用できる魅力的な製品を生み出している。一方、相

違点として、着物のアップサイクルは主に日本人が日本人向けに行うものであるのに対し、ベンダンのアップサイクルは外国人によって提案され、地元住民の利益のために実施されるものである。また、着物は高価で価値が高いため簡単には捨てられないが、ベンダンは手頃な価格であるため使われなくなると雑巾にされたり、捨てられたりすることが多い。

4.3 日本とインドネシアのアップサイクル比較にみる日本の特徴

日本とインドネシアのアップサイクルを比較した結果、インドネシアにおけるアップサイクルは地域社会に直接的な影響を与えており、地元経済の向上、新たな雇用の創出、スキルや知識を身につけさせる活動である。つまり、ベンダンのアップサイクルは物の再利用や女性たちへの収入源の提供を主な目的としている。一方で、日本では限られた資源に敬意を払い、大切に扱う考え方方が根付いており、「もったいない」という考え方のもとで、物を無駄にせず再利用するという意識が浸透している。そして、日本では着物などに魂が宿るという考え方がありわれる。着物には家族の思い出が込められており、捨てるのではなく形を変えて再利用することで、その記憶を保ち続けることができると考えられている。そのような考え方方が日本のアップサイクルの特徴の一つとなっているのではないだろうか。

参考文献

「Ideas For Good アップサイクルとは・意味」<https://ideasforgood.jp/glossary/upcycle/>(最終閲覧日：2025年1月28日).

後藤美里 「アップサイクルとは？重要視される理由や事例、簡単アイデアを紹介」『朝日新聞』2022年3月10日
<https://www.asahi.com/sdgs/article/14567291>(最終閲覧日：2025年1月28日).

「Earth Note 編集部 あきざくらの SDGs・大切な着物を日傘にリメイク。思いつなげるアップサイクルの取り組み」
<https://www.yoridori.jp/earth-note/interview-akizakura/>(最終閲覧日：2025年1月28日).

横塚瑞貴 「江戸時代に学ぶサステナブルな暮らし」 <https://at-living.press/sustainable/29093/>(最終閲覧日：2025年1月28日).